

# UNIVERSITY CONSORTIUM KYOTO

会報 2015.  
Jan No. 46

特集 ①

## 大学コンソーシアム京都 20周年記念事業

記念講演会、懇親会、職員同窓会

特集 ②

## 出向者座談会

現役出向者がコンソ京都のあれこれを語る！

特集 ③

## 龍谷大学 ～加盟校紹介～

ラーニングcommons設置準備担当者へのインタビュー  
人事担当者へのインタビュー

Topics 今後の事業の展開  
Information 開催行事予定



公益財団法人 大学コンソーシアム京都  
The Consortium of Universities in Kyoto

[ 特集 1 ]

# 大学コンソーシアム京都 20周年記念講演会

(京都FD執行部塾同時開催)

公益財団法人 大学コンソーシアム京都は、2014年3月に設立20周年を迎えました。このたび、例年、大学執行部の皆様を対象に開催しております「京都FD執行部塾」の対象者を拡大し、11月22日(土)に20周年記念講演会を開催しました。講師に京都大学総合博物館准教授の塩瀬隆之氏をお迎えし、「未来を切り拓く力を持った人材輩出にむけて～大学と高校がともに挑む次の20年～」と題してご講演いただきました。



## 全ての大学がなくなったとします

そのとき、高校・中学・小学校は何をすればいいのか。今までと同じ進学指導は意味を成しません。受験のためだけの勉強を教えているわけではない、というのであれば、本当に大学がなくなった世界でも児童・生徒に生きている力が届くような教育を、小中高校でもして欲しい。わたしが普段から考えているこの問題意識を、まずは参加者の皆さんと共有したいと思います。

## 変化の中でも通じる普遍的な力を

京都大学を一度退職し、経済産業省に入省する特別な機会を得ました。大学教員を辞して官僚になることを決意したのには、2つの理由がありました。一つは、東日本大震災支援の一環として、石巻の中学校で当時の中学2年生にキャリア教育の話をする機会を得たことです。その中で、受験勉強の延長線上に仕事が直接結びつくイメージが抱けずに、不安を抱えている親御さん、子どもたちの不安な様子を目の当たりにしました。「はたらく」と「学ぶ」がここまで大きく引き離されている現場に初めて遭遇し、今までモヤモヤしていた「はたらく」と「学ぶ」との間の距離を埋めたいと思ったのです。好奇心に素直に従って学ぶことや、学問を深める学びも大切です。しかし、それだけが学校の役割ではなく、生きていく力につながる学びを否定するのはおかしいと考えたのです。

もう一つは、企業がどのような人材を求めているのかを知りた

かったことです。今から20年前、工学部でもっとも優秀な学生たちは半導体産業を就職先に選び、これまで日本の貿易黒字をけん引してきました。しかし5年前のリーマンショック以降、新興国の台頭もあわさり、いまや何万人ものリストラが発表されるような苦境に立たされています。しかし調査報告の中では、従事する人の多くが、もう一度その立場を取り戻す自信を失っているにもかかわらず、7割もの人がその状況でもなお同じ分野かその会社に留まりたいと考えているようです。20年前に身につけた知識や経験がそのまま通用し続けるはずもなく、大きな壁の前でもあきらめず、新たな一歩を踏み出す力を提供できているのか教育界として反省せねばならないと考えるきっかけでした。

## 「はたらく」ということ

「はたらく」という実感は、お金を稼ぐ・稼がない、組織に属する・属さないに関わらず、社会へのはたらきかけそのものである。その実感は本来、生活の中で子どもたちが徐々に獲得していくべきものだったのです。自分の目の前にあらゆるものが与えられる環境の下でも、「世界は誰かの仕事できている」という当たり前の事実を子どもたちに実感してもらうことが大切だと考えています。

## キャリア教育とは

いつもいろいろな高校や中学校で先生方をお願いしている

ことがあります。それは、キャリア教育を特定の教科にするのはやめて欲しい。なぜなら、本来全ての生活や教育の中につながっていると思うからです。例えば、覚えた数学の方程式は一生使わないかもしれないが、それを通じて論理的思考力や集中力が身につくことを子どもたちに気づいてもらうことが大事です。また、会社が新入社員に求め、新入社員自身も足りないと感じているのがコミュニケーション能力で、異なる世代、文化、分野の人と交流できるような力が求められています。



## 日本と欧米との比較

日本では、ルールが与えられるのを行儀よく待って、そのまま待ちの姿勢になってしまう教育に長く接することが多いようです。日本の入試問題、例えばセンター試験のような問題では、与えられた答えの中から消去法でも選べるように、候補となる選択肢を選ぶことが普通です。他方、アメリカの教科書には、参考すべき秀逸な選択肢の例があります。例えば、二次方程式の解を求める問題で通常の解や誤答の選択肢以外に、「与えられた情報だけでは、この問題は解けない」という選択肢があるのです。そこには答えがないかもしれないから、その外側が有り得ることを知っていることがすごく大切であり、与えられたことが正しいかどうかを常に疑う習慣につながります。

## 「ために」から「ともに」

「インクルーシブデザイン」は、高齢者や障がいを持つ方と向き合いながらデザインをすることで、普段見逃していたことや価値観を取り戻すデザイン手法です。

美術館で目の見えない人に絵を説明したときに、コミュニケーションの本質に気づけたかもしれない、と今振り返っています。これまで分かったつもりでたいして絵を見ていなかったことを、目に見えない人に説明することで気づかされました。知っていることを誰かに教えてあげるという態度は驕りだったと気づかされ、絵を説明し終えた後、すぐに自然と自分から「ありがとう」という言葉が出て、相手からも「ありがとう」と言ってもらえました。こういう関係が「誰かのために」ではなく、「誰かとともに」という考えのスタートで、一緒に発見することがコミュニケーションの本質ではないかと考えることになりました。インクルーシブデザインの概念を知ったときにも、すっと得心したのは、この「ために」から「ともに」をキーワードにしようとするようになっていたからでした。

## 学びなおしとこれからの20年

20年前、40年前と違うことは変化のスピードがとにかく速いため、今から予測的に学びなおしを始めておかないといけません。

予測できないことが多いなか、一つ予測しやすいこと、それ

は人口減少です。今、学生・生徒と向き合っている大人の世代は誰もその人口が減りつつある状態を知らないので、誰もどうすればよいか正解を知りません。真実は自分たちで作るしかないのです。このターニングポイントでいち早く大きな変化に対応できるかが、次世代の子どもを守る上で大変重要です。

これから20年後に通用する教育というのは、これまでの20年で実践されてきた教育とは雲泥の差があります。今後20年の間に日本で主体となるはずの、今の学生・生徒たちに何を託すのか。ここからの20年は、働き方も学び方も根底から変わります。しかし、普遍的な価値として、学び続けることが、幾つもある正解のうちの一つであるというのは、疑いありません。生涯学び続けることの意義が身に染みるような深い学びの原体験を、高校・大学の7年間で身につけることが大切です。

## もう一度聞きます、 全ての大学がなくなったとします

大学コンソーシアム京都はこれまでの蓄積から、大学同士をつないでこられました。本当に理想の大学像を作れるのだとしたら、ここしかないと思います。それぞれいろいろな制約、事情があるなかで、大学コンソーシアム京都が、たくさんの大学が集結する京都だからこそ、子どもたちが次の世代で生き続ける力を身につけられる7年間を過ごせる拠点として、英知を結集していきたい。そして子どもたちが自らの理想の生き方を描ける高校・大学の7年間を過ごす場所となってほしいと思います。

### PROFILE

#### 塩瀬隆之先生紹介

1998年 京都大学大学院工学研究科精密工学専攻修了。神戸大学助手、京都大学助教、同総合博物館准教授を歴任後、2012年7月より経済産業省 産業技術政策課にて、技術戦略担当の課長補佐に従事。2014年7月に京都大学 総合博物館 准教授(技術史担当)として復職。「黙して語らず、されど師匠から弟子に伝わる技の伝承」に始まり、視覚障がいのある人との「言葉で見る美術鑑賞」まで、一見難しそうなコミュニケーションの研究を通じて、「伝わるとは何か」の本質に関心を寄せる。現在、高齢者や障がいのある人をものづくりプロセスに巻き込むインクルーシブデザインのワークショップを100回以上重ね、「ために」から「ともに」へと社会が変わるコミュニケーションの場づくりを実践する。立場や能力、文化の異なる人々が、お互いを高めあい、豊かに成長できる社会づくりにおいて、このインクルーシブデザインの手法が示唆に富むとして、その紹介を続けている。

## 塩瀬先生へ単独インタビュー!!

塩瀬先生にご講演いただいた後、研究室にお伺いしました。講演に込められたメッセージ、その核心に迫ります。

**事務局** 「ために」から「ともに」というフレーズが印象的でした。

**塩瀬**

生まれつき目の見えない子どもに、理科の授業で星を説明するとします。例えば化石や骨は触ることができますが、星は触ることができませんよね。そこで当時、



左から直径1ミリ、3ミリ、30ミリ

筑波附属盲学校で理科教諭をされていた間々田先生が作られたのが、この教材です（右上写真）。これは、小さい方から月、地球、木星の大きさの割合で、体積でいうと月からみて地球は27倍、木星は地球の1,000倍になります。では太陽はどうでしょうか。ビーチボールほどの大きさなんです。

直径3ミリの地球から見たとき、ビーチボールの大きさの太陽を1ミリの月が隠す、これが日食です。これって奇跡だと思いませんか。そう考えると理科で習うことも、インパクトがあり頭に入る。これが「～のために教えてあげる」ではなく「ともに学ぶ」ということだと思います。「ために」はいいことではありますが、どこかで自分を別のところへ置いてしまう。ケアをする人も自分を犠牲にしてまで、目の前の人を助けようとしてしまうと、疲弊してしまって結果として続かなくなってしまう。自分も同時に大切にしていれば大丈夫です。自分自身も楽しく、そして継続できるような、そんなフラットな関係が「ともに」という言葉に込める思いです。ただ、それでもできないこともあるので、その時に助ければいい。講演でも言いましたが、教えようとする、その相手から学べないことと同じで、助けようとする相手にも助けられない。助け助けあい、教わり学び合える関係、というのが無理なく持続する関係で、「ともに」の中に「ために」が入ればいいというイメージですね。

例えば、困っている人を見たとき「～のために助けなければいけない」と身構えるよりは、先に手を差し伸べる方がいい。それが大事なんだと思います。そこに気づきや学びがあるので、あまり学びを特別なものにしない方がいいですね。

**事務局** 次に大学コンソーシアム京都に期待することをお聞かせください。

**塩瀬**

例えば、大学入試に関しては、多くの方が問題意識を持っていると思います。ですが、一校一校の改革からは、大きな改革には至っていないのが現状ですよ。そこで、全国に先駆けて設立された大学コンソーシアム京都が20周年を迎えたことをきっかけに、スケールメリットを生かして「京都から大学入試を変えよう」となれば、すごくアピールできますよね。消去法でも選べる選択肢練習ばかりでなく、選択肢の外側にあるかも知れない可能性にまで注意を払えるような人材を京都の地に集めたいですね。大学進学率が突出して高い京都であればこそ、京都で学ぶと一生、生きていくために必要な力が育つというメッセージを発信できるのではないかと思います。

京都の大学が力を合わせて「自分たちで変えようよ」と手を取り合い、大学コンソーシアム京都がバーチャルユニバーシティとしての魅力を高めるためにも、ぜひ真剣に考えて欲しい。それが大学コンソーシアム京都のブランドを高めることになると思います。

**事務局** 来年度から大学コンソーシアム京都で、京都ならではの特徴を活かした「世界遺産を舞台としたPBL科目」を開講します。

**塩瀬**

よい取り組みですね。しかし、そこで考えていただきたいことがあります。全国でもアクティブラーニングやPBLを導入する大学が増えています、一つ気になるのが、単なる「真似っこ」にならないように気をつけるということです。“Project Based Learning”の前に“Problem”ありきからスタートするのが本来であり、そこにリアリティがないとその場を荒らすだけになってしまいます。プロブレムを真剣に考えて、それを解決するにはどうしたらよいかを学生に考えてもらうことが大事だと思います。そういう意味では、その地域の方や企業など、いろいろな方を巻き込んでより実効性のある、持続可能なものになるといいですね。このように横の連帯を強めることを大学コンソーシアム京都がリードして実行して欲しいですね。学校の教育現場に企業やNPOが実際にパートナーを組むという段階までは様々な障壁があります。あと、横断的取組みでは是非実現して欲しいのは、「選挙」ですね。若者の投票率が低いと言われている昨今、20代の投票率は60代の半分で37%程度だそうです。20歳になった学生が、親元を離れているとなかなか投票に行きませんよね。例えば、下宿をしている学生で、住民票を京都に移している学生には投票キャンペーン、住民票が地元にある学生は、期日前投票の都道府県別集約など、できることがいろいろあると思います。もちろん特定の政党に偏ったり、選挙活動に協力するものではありません。京都の大学全体で、初年次教育として「市民としての在り方」、「社会人としての権利と責任を考える第一歩」として、大学の社会的意義を訴えるよい機会ではないでしょうか。「20歳の学生の投票率を京都で30%上げる、自ら日本の政治を変える、大学のまち・学生のまち京都をつくりませんか!？」をミッションにするのです。4年後の選挙までに、ぜひ国づくり、社会づくりに意識の高い学生を、大学のまち京都で育ててほしいと思います。

**事務局** 貴重なご意見、ありがとうございました。

【取材日】2014年11月28日



塩瀬先生の研究室にお伺いして、取材をさせていただきました。落ち着いた素敵なお部屋で先生のお人柄がうかがえるようでした。

### インタビューを終えて (事務局より)

講演、インタビューを通じて、塩瀬先生のお話に終始引き込まれていました。そこで、塩瀬先生は「コミュニケーションとは、知っている言葉を組み合わせて、相手にインデックスを送っているだけで、何かを伝える、分かってもらおうということが、そもそもおこがましいのではないかと。言葉の押し付けになると相手には届かない」と言われたことが印象的でした。コミュニケーションについて、「学びなおし」をする機会をいただいたことに感謝…。

## 記念懇親会

懇親会は、当財団顧問である京都市長 門川大作氏の挨拶から始まりました。門川市長は大学コンソーシアム京都の設立から20年間を振り返った上で、「組織は成熟期を迎え、次の20年を見据えて事業の在り方を再構築する必要がある。今後は大学のまち・学生のまちのブランディングや留学生誘致・支援のためのオール京都での取組を大学コンソーシアム京都・京都市・大学や関係機関と連携しながら進めていきたい」と今後への期待を述べられました。その後は、京都府政策企画部企画監 岩永美好氏による京都府知事 山田啓二氏の祝辞紹介、前理事長である同志社大学教授 八田英二氏による乾杯が行われ、終始なごやかな雰囲気の中、大学関係者、自治体関係者約60名が懇親を深めました。



## 20周年職員同窓会

夕刻に行われた「20周年職員同窓会」では、100名近くのOB・OG職員と現職職員が参加。歴代出向者によるエピソードリレーでは、設立当時の思い出や、発展期の苦労話など、20年を振り返りました。また、京都学生祭典からは「京炎そでふれ！スペシャルバージョン」が披露されるなど、終始活気のある同窓会となり、参加者同士が懇親を深める場となりました。当日、参加されていた元出向者の方に、それぞれお話を伺いました。



▲ 徳永 寿老（大学コンソーシアム京都 専務理事・事務局長）による閉会挨拶の様子。



▲ 各テーブルからは、久しぶりの再会を喜ぶ声も多く聞かれました。



▲ 京都学生祭典「京炎そでふれ」のスペシャル演舞の様子。手拍子がおこる中、学生たちの熱気あふれる舞を楽しみました。



岡田 治之 氏

（大谷大学・大谷大学短期大学部 企画・入試部 事務部長）  
出向期間：1997年～1998年  
担当業務：単位互換、FD 事業他

元出向者の方へ  
インタビュー

僕が出向した時はちょうど財団を立ち上げる時期でした。午前中は大学を回って新しい情報を集め、午後に企画を考えるという大学とは全く異なる仕事のスタイルでした。大学コンソーシアム京都は、10年、20年先を見据えて自由に挑戦できるよい経験の場ですね。普段は出会えない学長・副市長クラスと会議で出会う事も多く、驚いた事もいい思い出です。あれから17年経ちますが、その時に関わった人とは今でも情報交換をしますし、繋がりが活着いていると思います。これからの数年間、大学は本当に厳しい時代に入ります。こうした環境下において、大学コンソーシアム京都には、大学の集積を生かした創造性豊かで先進的な取組みを発信し、1大学も欠ける事がないように事業を進めていただきたいですね。



久保田 千雅子 氏

（京都産業大学・総務部付（株）サギタリウス企画）  
出向期間：2006年～2007年  
担当業務：共同研究機構、学生交流事業

最初に担当した共同研究機構では、ちょうど全国で地域学や地域検定試験が盛んになり始めた頃で、大学コンソーシアム京都でも「京都学（地域学）」の研究や講座の開講に取り組んでいました。この事業をとおして京都の伝統文化の家元や、神職の方々との出会いは私の仕事観だけではなく人生観にまで大きな影響を与えてくれました。

また、芸術系大学作品展、京都学生アートオークションをとおして、芸術系大学で学ぶ学生のキャリア教育の一端を担えたことは、学生支援の新たな視点を得ることができました。大学に戻った今、出向期間中に得た出会いや学びが活かしています。これからも大学コンソーシアム京都は、大学職員の研修の場であり、加盟大学単独ではできない先駆的な取り組みを展開していただきたいと思っています。

最後は全員で集合写真を撮りました！！



現役出向者がコンソ京都のあれこれを語る！

# 出向者座談会 ①

大学コンソーシアム京都（以下、コンソ京都）は、財団が直接雇用する職員とともに、財団加盟校から2～3年の任期で出向している大学職員が事務局を担っています。出向者座談会①では、その出向者のうち、各事業部の責任者である次長に集まっていたいただき、現在の仕事やコンソ京都での働き甲斐、出向してみて新たに発見できたことなどを率直に語っていただきました。



**平岡** **Q** 最初に、コンソ京都で働いてみた率直な感想をお聞かせください。

**井上** 大学を越えて、様々な人と一緒に仕事ができる機会だと思っています。大学によって業務スタイルや多様な価値観、文化的背景も異なるため、それらの良いところを取り入れるように心がけています。本務校に帰ってからも良い点を取り入れていきたいですね。また、イベントの応援など事業部を横断して協力し合える仕組みはとても良いと思います。

**平岡** コンソ京都では、大きなイベントの時は事業部のメンバーが応援体制を組むのが慣習ですね。また、業務の進め方に、前任者の本務校等のカラーが残っているのも面白いのです。私は、本務校の身近なところに元出向者がおられたこともあり、コンソ京都に対してイメージを持ちやすく、来てみて良かったと感じています。特に色々な人や制度に触れることが出来る点が魅力です。出向中は学外の方々とのネットワークづくりも大切だと考えています。

**生谷** 他大学の動きとコンソ京都独自の業務スタイルや考え方を知ることが出来て参考になります。また、SDや高大連携など、自分の担当業務以外の情報にアクセスしやすいのも魅力だと思います。さらに言えば、出向という期間限定の仕事であるがゆえに、「その間に何ができるか」を意識的に考えることが出来ると思います。

**平岡** **Q** 皆さん事業部の次長という立場の方々にお集まりいただいておりますが、業務やスタッフのマネジメントという観点から感じておられる点をお話いただけますか？

**林** 本務校の職場では様々な部署や業務を経験してきたこ

ともあり、上司や年上の先輩のみなさんから多くのマネジメントスタイルを学びました。それらの経験を踏まえて事業部のマネジメントを行うことを心がけています。

**井上** この秋まで在籍した学生交流事業部では、主に学生指導を担当していました。そのため、指導に当たる職員の意思統一を図れるように心がけました。また、次長として自分が取り組んでみたいアイデアや思いを出来る限り口に出してスタッフに伝えることも意識しました。自分は強いリーダーシップで引っ張っていくタイプではないため、みんなが気持ちよく働けるように、積極的にコミュニケーションを取るよう心掛けています。11月から、異動により教育開発事業部の次長になりましたが、学生交流事業部のときと異なり、私よりも全員年上の経験も豊富なスタッフの方と関わっています。そこでどのように組織をまとめていくのかが今後の課題だと感じています。

**生谷** この11月から、教育・施設管理事業部の次長となったばかりですが、メンバーに助けてもらっているという実感が強いですね。今後は声かけといったコミュニケーションを大切にしたいと思います。

**平岡** 本務校でも、後輩職員を指導する機会がありましたが、今年コンソ京都で次長になり、これまでの経験がマネジメントにも役立っています。ただし、同じ事業部内の業務でも京都市などの自治体の方や教員など様々な分野の方との関わりが多く、切り替えが難しい面も感じています。

**井上** 部下の仕事のマネジメントという点では、超過勤務が多くなりがちなスタッフへの声掛けを心がけてきました。

**林** 井上さんの在籍しておられた学生交流事業部では、出退勤管理のマネジメントがとても行き届いていて参考になりました。

**生谷** 組織として早く帰れる雰囲気を作っていくことも大切ですね。

**平岡** **Q** すでにいくつか出されていますが、コンソ京都の良い点やそれに加えて課題と感じておられる点等について、さらにお聞かせください。

**生谷** 現在、主に生涯学習事業に取り組んでいます。本務校で担当経験があった分野ですが、各大学を取りまとめ



るというこれまでにない業務の広がりを感じています。また研修制度も、コンソ京都内で重要視されており、様々な研修に参加しやすい風土があります。「参加して当たり前」という雰囲気さえあります。

**林** 研修が保障されているのはありがたいですね。私もSDにかかわる研修や授業設計にかかわる研修にも参加し、視野やネットワークが広がりました。またネットワークでいえば、財団内外を巻き込んだイベント後の打ち上げなどもさかんですね。京都駅という立地が良いため、本務校の教職員が仕事帰りなどに立ち寄ってくれる機会も多いです。

**平岡** 出向が期間限定であるからこそ、同僚や関係者との繋がりが強いのかもかもしれません。

**生谷** コンソ京都では他大学の教員や職員だけでなく、京都市や京都府などの自治体関係者とのネットワークづくりも大きいですね。課題としては、情報発信機能が弱いことと、事業のルーティン化が気になります。事業の選択と集中など、もっと工夫ができるのではないかと思います。

**平岡** 私は業務を通じて、京都の大学に勤めながら、京都のことをあまり知らなかったことに気づきました。また、様々な加盟校に実際に足を運ぶ機会を得て、キャンパスの立地やアクセスなどこれまで考えなかったことを考えるようになりました。

**平岡** **Q** 今後コンソ京都でやってみたいこと、これからの出向者に対して伝えていきたいことについてお聞かせください。

**林** 私自身、所属する組織に愛着を持つ傾向にあるようで本務校にも愛着はありますが、コンソ京都にも愛着があります。そのため、財団の目的や発展を見据えて、「何かやろう」という気持ちになれます。それらの視点で前任の事業部では京都の特色を活かした京都世界遺産PBL科目を立ち上げ、次年度から授業が始まります。現在の事業部でも財団の特色を踏まえて業務を進めていきたいと思っています。

**井上** 今後、SD事業として、2015年度開講を予定しているSDゼミナールの実施に向けた準備に取り組む予定です。新たな研修の講師やコンソ京都のSD事業に関わっておられる方々とのネットワーク・人脈づくりを通じて、

今後、大学職員としてどう働いていけばよいかを考え、また、マクロな視点で業務を見ることが出来るようになればよいと考えています。

**生谷** 現在、生涯学習事業で「京（みやこ）カレッジ」の2016年度新展開に向けた計画を進めています。もっと積極的にコンソ京都を利用してもらえるように働きかけたいと思っています。また、コンソ京都のスタッフがより積極的に学ぶコミュニティとなるためにも、気軽に学び続けることのできる勉強会があればいいなと考えています。例えば自大学で取り組んできた業務などをプレゼンテーションすることで、普段の業務でも「あの人に相談してみよう」と選択に幅がでることも考えられます。そういう機関であれば出向者・出向元ともメリットが出るのではないのでしょうか。

**平岡** 加盟校から「出向させたいけれど難しい」などの事情も聞こえてきますが、財団では「職員人材育成ビジョン」を作り、出向者の育成を促す枠組みを推進しています。出向経験者として、ぜひ規模も含めて、多様な大学から出向してほしいと思います。

**林** コンソ京都20周年同窓会の仕事をしていると、過去には出向者を送って下さっていたのですが、今は出向者がいないという加盟校がたくさんあることに気づきます。事業別の委員会への委員派遣にとどまらず、ぜひ多様な大学から出向者を派遣していただきたいです。

**井上** 出向してみてその良さが初めて分かりました。大学職員としてキャリアを形成していくうえで、貴重な経験だと実感しています。短期間のローテーションでもよいので、より多くの大学職員の方に来ていただきたいと思います。

【取材日】2014年11月19日



## メンバー情報



ファシリテーター（進行役）

平岡 涼（大谷大学） 調査・広報事業部 次長

教育事業部（現：教育・施設管理事業部）でインターン事業に携わる。異動後、総務・広報部では広報と研修事業を経験し、2014年4月より、調査・広報事業部へ異動。

【入職】2000年4月 【出向】2013年6月

出向期間／1年8か月（2015年1月現在）



生谷 謙次（龍谷大学） 教育・施設管理事業部 次長

教育・施設管理事業部 主幹として、生涯学習事業（京カレッジ）・単位互換事業に携わる。2014年11月より、教育・施設管理事業部 次長へ昇任。

【入職】1998年4月 【出向】2014年4月

出向期間／10か月（2015年1月現在）



井上 圭太（同志社大学） 教育開発事業部 次長

学生交流事業部 次長として、学生交流事業（京都学生祭典、京都国際学生映画祭）に携わる。2014年11月より、教育開発事業部へ異動。

【入職】2002年4月 【出向】2013年5月

出向期間／1年9か月（2015年1月現在）



林 龍徳（立命館大学） 学生交流事業部 次長

教育・施設管理事業部 次長として、単位互換事業及び施設管理・生涯学習（京カレッジ）事業に携わる。2014年11月より、学生交流事業部へ異動。

【入職】2003年4月 【出向】2013年5月（3年間の予定）

出向期間／1年9か月（2015年1月現在）

私たち コンソ京都でこんな事をやっています！

# 出向者座談会 ②

続いて各事業部で運営の軸を担っている主幹の皆様にも、企画の最前線の視点からその課題や魅力についてアピールしていただきます。



**鹿野** Q まず、現在の業務の状況をお聞かせ下さい。

**中本** 学生交流事業部に所属しています。学生交流事業部では、課外活動として学生が決めた企画を職員がサポートするという役割を担っています。本務校で担当してきた業務のように「自らが実施する」というものではないので、学生にアドバイスをするなど、それがとても新鮮に感じられます。

**塩野** 単位互換制度による短期留学プログラム、留学生支援、教職員を対象とした英語研修などを担当しています。

**種田** インターンシップ事業を担当しています。本務校で担当した部署は、インターンシップをコンソ京都ほど重視していなかったため、現在は、業務の現状を把握することで精一杯です。

**前田** 単位互換事業を主に担当しています。現在は、2015年度に向けた開講準備を進めています。この秋までは、FD 事業、SD 事業を担当していました。

**鹿野** Q コンソ京都への出向がわかった時、どんな気持ちでしたか？

**中本** 以前にコンソ京都の事務局に来る機会があり、職場のメンバーの仲が良いなあという印象を持っていました。あとは、新しいことに取り組みると意気込んでいたのを覚えています。

**種田** 基本的に4月異動が多いので、聞いた時は、びっくりしました。また、キャンパスプラザ京都の建物全体がコンソ京都で、大きな組織と思っていたら、思ったより人数の規模が小さいことが意外でした。

**前田** 出向には以前から興味は持っていました。実際に来てみて、他大学からの出向者が上長になると、仕事の進め方に違いがあることを経験し、いい刺激を受けました。

**塩野** 「国際業務の担当だ」と言われて着任しましたが、外国人の方との折衝等が思いのほか少なく、語学力より行動力や決断力、複数業務への対応力が必要だということ

とがわかって少し驚きました。

**鹿野** Q コンソ京都の仕事でやりがいを感じるのとはどんな時ですか？

**種田** まだ余裕がなく、やりがいを感じるまで至っていませんが、出向解除までに感じられるようになればよいと思っています。

**前田** 現在担当しているのは、教務や京都世界遺産PBL科目の企画など未経験の分野であり、新しい経験ができることにやりがいを感じています。

**塩野** 事業運営において裁量が大きい分、行動力が身につくというメリットがあると思います。イベントについて立ち上げから終わりまですべて一貫して関わることが出来ます。

**中本** 私も同感です。それから、本務校の職場は施設担当で、取引先業者の方や研究者など、大人ばかりを相手に仕事をしてきました。こちらでは、学生という「出来上がっていない人間相手」の仕事を経験でき、学生と一緒に創っていくという、その面白さを感じています。

**鹿野** Q コンソ京都の良いところはどんなところでしょうか。また、その逆に改善したほうが良いところについてもお聞かせください。

**塩野** 小額の予算規模でも、アイデアを出し合って充実したよいものを作ろうとするところは大変良いと思います。

**前田** 事務局の人の入れ替わりが激しいこともあって、業務の引継ぎが上手くできない点は改善したいですね。

**塩野** 過去の記録や資料の整理をもっと進めると仕事がしやすくなると感じています。同じ業務を繰り返していたりするので。

**種田** ただし、入れ替わりが多いせいか、着任時に基本的な説明会があり、助かりました。事務局共通マニュアルである「仕事の進め方 BOOK」があるのも大変良かったです。

**中本** 担当者の変更が多い分、事務局内の引っ越しも多いですね。個人的には引っ越しが多いと机の整理整頓ができて都合がいいのですが、それから事務局全体のスケジュールをイントラネット上で共通管理しているので、事業を越えた日程調整などがしやすいのも便利です。また、各事業で使用する備品等の共有をさらに進めると良いと思っています。

**前田** 事業部間の縦割りが強い印象を持っています。知識やノウハウの共有という面では、もっと情報交換しても良いのかもしれない。異動して、事業部によって会議の運



営方法等にも大きな違いがあることが判りました。ノウハウに限らず、様々なリソースの共有が必要だと思えます。

**鹿野** **Q** コンソ京都では研修も重要視していますが、出向中に学びたいことや身につけて帰りたいことはありますか？

**中本** 会計に関する基礎知識です。大学人として知っておくべき内容だと思います。それから、事業部を横断する事業がもっとあると勉強になると思えます。

**種田** これまでの仕事では、学生や教員との関わりがほとんどでした。企業など外部の方との交渉にあたり、ビジネスマナーの必要性を感じています。また、担当しているインターンシップ以外の学生関連事業の担当者と情報共有を図りたいと思えます。

**前田** 他大学の動き、高等教育情勢や文部科学省の政策などは、本務校に在る間は意識して学ぶことがありませんでした。出向期間中にぜひ学びたいと思えます。

**鹿野** **Q** これからやってみたい仕事についてお聞かせください。

**中本** 京都学生祭典の運営に関わって、根拠となる規程が未整備であったり、不十分な点があります。今までの経験を活かして、これについて取り組みたいと考えています。

**塩野** アイデアレベルですが、京都国際学生映画祭に京都在住の留学生をもっと関わらせる仕掛けが出来ないかと考えています。

**中本** それは面白いですね。

**前田** 異動したばかりですので、まずは教務の業務を理解し、2015年度より始まる京都世界遺産 PBL 科目を成功させたいと考えております。

**鹿野** **Q** 先ほど業務の縦割りの話が出ましたが、一方でイベント等の全員応援体制はコンソ京都ならではの「伝統」ですね。



**中本** 応援メンバーからは、主担当者では気づかない点を意見としてもらえるので、とても助かっています。

**前田** インターンシップの受入れ先への訪問や、京都の大学「学び」フォーラムへの参加呼びかけのための高校訪問など、全員体制で営業する機会がありますが、担当業務でない分、しっかりと勉強しないと、先方とは表面的なお話しかできない難しさも感じております。SD フォーラムの分科会などでは、イベント要員をしながら講演を聴講してもらうこともできるので、勉強の機会として活かしてほしいと思えます。

**鹿野** **Q** 最後に、コンソ京都の今後に向けて一言お願いします。

**塩野** もっと京都の地の利を生かした国際化を進めてほしいと思えます。京都ならではのブランディングをもっと高めることができれば良いと思えます。

**中本** コンソ京都は、事務局組織が小さい分意思決定が早く、前に進める力が強いと感じています。また1つの事業を最後まで回す経験は大変貴重です。それからコンソ京都事務局 OB・OG 会に90名以上の方が集まるといのは素晴らしいことだと思います。皆さんコンソ京都に想いを持っておられるのだと思えます。

**前田** 今後はコンソ京都の中期計画である「第4ステージプラン（2014～2018年度）」をどう次に繋いでいくかが重要になると思えます。業務の遂行にあたっては、コンソ京都内での連携をより図っていききたいと思えます。

**種田** インターンシップを担当しているなかで、コンソ京都に対して、京都の企業からの知名度がもっと上がればよいと願っています。

**鹿野** 皆様、ありがとうございました。

【取材日】2014年11月25日



## メンバー情報



ファシリテーター（進行役）  
鹿野 博志（同志社大学）

高大連携・インターンシップ事業部  
次長として業務全般に携わる。  
【入職】1993年4月  
【出向】2014年5月  
出向期間／9ヶ月  
(2015年1月現在)



しおの なかこ  
塩野 敬子（京都大学）

教育開発事業部（国際業務担当）主幹として  
国際連携業務に携わる。  
【入職】2013年10月  
(※以前に京都大学で8年半の経験あり)  
【出向】2013年10月  
出向期間／1年4ヶ月(2015年1月現在)



たねだ あつこ  
種田 敦子（京都大学）

高大連携・インターンシップ事業部 主幹として  
インターンシップ事業に携わる。  
【入職】2008年9月  
【出向】2014年7月  
出向期間／7ヶ月(2015年1月現在)



まえだ しょうご  
前田 昭吾（立命館大学）

教育・施設管理事業部 主幹  
教育開発事業部（FSD 担当）を経て、  
2014年11月 現事業部へ異動。  
【入職】2007年4月  
【出向】2013年5月  
出向期間／1年9ヶ月(2015年1月現在)



なかもと まさかず  
中本 雅和（同志社大学）

学生交流事業部 主幹として学生交流事業（京  
都学生祭典、京都国際学生映画祭）に携わる。  
【入職】2006年4月  
【出向】2014年6月  
出向期間／8ヶ月(2015年1月現在)

# 龍谷大学

2015年4月、新たに農学部、国際文化学部の移転に伴う国際学部の設置、さらにラーニングコモنزの開設などの改革を進める龍谷大学。目前にせまったラーニングコモنزの設置準備に携わられている方々にお話を伺いました。

RYUKOKU UNIVERSITY 01

## 様々な人・情報が交じり合う活気ある空間に

長谷川 岳史 氏 龍谷大学 教学企画部長 大学教育開発センター長  
井上弓子 氏 龍谷大学 教学企画部 兼務/教学部 課長

**Q 2015年春に新設されるラーニングコモنزの設置にあたっての経緯やその特色についてお聞かせください。**

[長谷川] 設立の背景としては、深草キャンパスの施設整備計画として2011年度の6月から深草キャンパスの施設検討委員会が立ち上がり、旧1号館を建て替えるということになりました。さらに、大学の第5次長期計画の諸事業との関係から学生の居場所を確保したいという意向がありました。

まず施設設備の面では、空間の創出が課題となりました。学生の居場所づくりと、その可視化です。学習する学生の動きが見えて、正統的周辺参加を促すことが必要ではないかといった課題があがったのが全学的な動きの発端です。

もう一つの動きとして、大学教育開発センターの指定研究プロジェクトがあり、同時期にセンターとしても2011年度のプロジェクトで「学生の学修支援環境に関する研究」を始めたところでした。この当時はコモنزをFDのテーマにするのは目新しく、他大学を視察したり調査しました。

全学の動きとセンターの指定研究が合流するきっかけとなったのは、2011年度の龍谷大学FDフォーラム「学びのコミュニティをデザインする」です。東京大学の山内祐平先生をお呼びし、約160人が参加しました。その際、深草キャンパス施設検討委員会のメンバーも参加し、課題認識が共有されました。

[井上] 実際には、施設面と、学修環境(教学)の面の検討とが並行して進んでいて、それが龍谷大学FDフォーラムで

合流したということになります。

[長谷川] 山内先生のご講演のおかげで「コモنز」という概念が全学的に位置付けられることになりました。

「和顔館」(旧1号館の新称)1階を、コモنزにしたいという思いは「学生の居場所」という発想からでしたが、議論していく中で、国際文化学部の移転に伴い深草の学生数が増加することや、グローバル化への対応、さらに図書館での資料を使った学修など、様々な課題がある中、コンセプトに基づいた形でゾーニングするとの合意に至りました。それが、グローバル、ナレッジ、スチューデントの3つのゾーンです。留学生との交流スペース・語学学修スペース、図書館を活用した学習スペース等も必要ですが、多様な学生が集まるフレキシブルなスペースを確保する必要があり、この3本柱が決まりました。基本コンセプトは次の通りです。

### 【各コモنزの基本コンセプト】

機能別	スチューデントコモنز	グローバルコモنز	ナレッジコモنز
コンセプト	学生による「学び」の創造と交流の空間	マルチカルチャー、マルチリンガルな活気に満ちた学びの空間	学生が主体的に「調べ、考え、書き、作る」の知の空間

**Q 施設には、それぞれの所管部署が入られるという事ですか？**

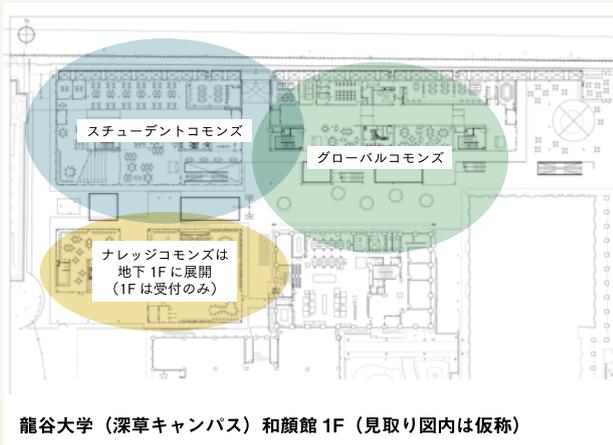
[長谷川] そうです。グローバルはグローバル教育推進センター事務局、ナレッジは図書館が所管すると決まりました。スチューデントコモنزは、FDの観点から学修支援という観点を加える形で教学企画部が所管する予定となっています

**Q コモنزの設計について、特に留意された点についてお聞かせください。**

[長谷川] コンセプトについては、あまりカチッと決めてしまわないように留意しました。目的をもった学生しか入れないようなスペースにはしなかったのです。だから学生にとってはここで様々な事が行えるという方向で、3つの部署がゆるやかな連携を取りながら、それぞれの機能をコモنزに落とし込むという合意を積み重ねて、具体化していきました。

それから「ラーニングコモنزはどこなんだ」という議論





があったのですが、そうではなく、全体が龍谷大学のラーニングcommonsで、あるいはこのcommonsが拠点となって、ほかのスペースにも派生していいわけです。つまりこの場所からの学びの展開という意味も含めて、全体を龍谷大学ラーニングcommonsと呼ぶことにしました。また、適度な距離で3つのcommonsを設置するので、ゆるやかな区分で共存できることが、一つの特徴と言えますね。

**Q これだけの空間を複数部局でシェアしながら1から設計できるというのは素晴らしいですね。**

[長谷川] 実際に運営する部署が積み重ねてきていた検討が、大学の目指す方向とフィットして、今こういう形になってきています。結果として、部署の連携体制も新たに構築できるのかなと思っています。それは学生や学修支援というのをキーワードにした結果だと言えますね。

他大学の例もたくさん見に行ったんですよ。そのうえでたどり着いたのは「ラーニングcommonsに一般はない」という事ですね。何のために作るのかというコンセプトを大学が責任を持って定めることが大事です。それと始める当初に細かな点をカチッと決めてしまうと、大学が使い方を縛ってしまうことになります。学生の参画もそうなんですけど、学生の役割を定義してしまう事になりかねません。コンセプトや主旨を理解してもらった上で集まってくる学生を主体に運営していきたいという考えが底辺にあります。

**Q これを契機にcommonsスタッフなど特定の学生チームを定めずに、既存のいろんな学生の組織をうまく組み合わせながらマネジメントしていくというお考えでしょうか。**

[長谷川] かなりトライアルな部分が多いので、「commonsチューター」というのは設置しますが、研修プログラムを実際の実践に合わせたものにするために、まず設置してみて、研修を受けてもらい、適切なプログラムを構築するというやり方を取りたいと思っています。チューターは今のところ大学院生を想定しています。活動は、初めからこうしますというよりも、実際に学生スタッフを募集して企画運営にも携ってもらいながら、2年間で龍谷大学の研修システムを構築する計画です。ほかの部署でもやっているピアサポートなどにもシステムを派生できるような

プロジェクトとして、位置づけています。運営するスタッフとしてcommonsにどのように定着するかという点を見ながら、2年間で適正な判断をしたいと考えています。さらに、学生自身からの様々な企画を吸収する仕組みというのは持っておかないといけないと考えています。「学び」をキーワードとした空気感ができればいいと思いますね。

**Q ラーニングcommonsが完成した際に学生を呼び込む仕掛けは考えておられますか？**

[長谷川] 人の流れやどのエリアに人が集まるかなどは、開設してみないとわからないですね。特にスチューデントcommonsは、賑やかな雰囲気になるだけではなく、文化系のサークルが発表できる機会をもてるようにもしてあげたいと思っています。まだ検討中ですが…。

**Q 文化系サークルの発表会は予想していなかったのですね。そこまで用途が広がると今までできてなかった学生も呼び込めますよね。サークルにとってここで活動がアピールできる場になれば、いいですね。**

[井上] もちろんそれだけになってはいけないと考えています。スチューデントcommonsでは、ランチセミナーを開催したり、成果発表会などを行うスペースとしても使用してもらえたらと思います。先生や学生に、どんな使い方をしたいかを考えてもらい、オープニングの際にそれを発表してもらうことも考えてます。

現在、準備委員会では学生への周知、イメージを伝えるための検討を行っています。

[長谷川] 準備委員会で、グローバル教育推進センター事務局や図書館と議論を重ねてきましたし、どの部署にも、それぞれのアイデアがあるんですよ。そういった意見を活かしながら、可能な限り、ラーニングcommonsで披露してもらうようにしたいと思います。今まで見にいかなかった知的な活動が、ここで見られるという場所にしたいですね。関係部局との連携については、こちらからも協力を要請して展開していきたいと思っています。

[井上] ラーニングcommonsは「多様な学びの空間」、スチューデントcommonsに関しては、あらたな『学び』の創造と交流の空間にしたいですね。

**お話を伺って、私たちも完成がとても楽しみです。開設後、学生の皆さんが、ここでいきいきと活動されている姿を見に、またお邪魔したいと思います。**

**本日はありがとうございました。**

【取材日】2014年11月6日

龍谷大学のラーニングcommonsは、  
2015年4月に深草キャンパス、  
2015年9月に瀬田キャンパスに開設されます。  
詳しくは大学ホームページでご確認ください  
<http://www.ryukoku.ac.jp/>

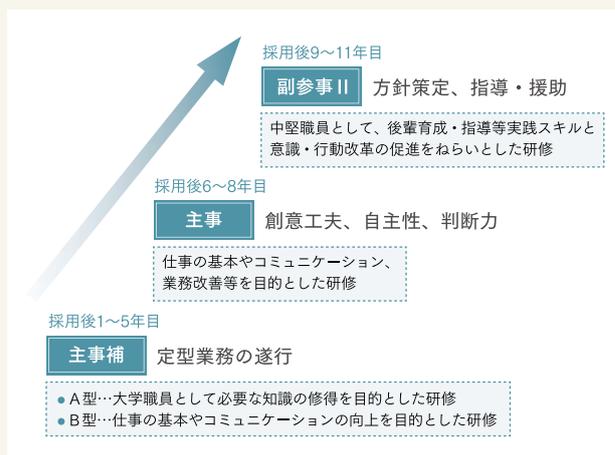
# 10年、20年先を見据えた職員育成を

屋山 新 氏 龍谷大学 総務部 部長  
内藤 恒義 氏 龍谷大学 総務部 人事課 課長

**Q** まず、龍谷大学の近年の取り組み・特色のある取り組みについてお聞かせください。

[屋山] 本学では、2009年度から2010年度にかけて事務職員の人事制度改革を行い、「資格制度、評価制度、給与制度、研修制度」と大きく4つの制度を柱に動き出しました。特に研修制度については、まだまだ改良の余地があると思っており、現在も改革に取り組んでおります。研修は大きく分けると、就任者研修、採用後5年目までの職員に向けた単位修得型研修、10年目までの職員に向けた集合研修を行っています。

[内藤] 職能資格(右表)ですが、基本的に新卒後は主事補を5年、主事を3年、副参事Ⅱを2年と、概ねこの10年間に資格別で大学主導の研修を受けることになります。主事補研修はA型とB型にわかれ、A型は本学の現状、入試や就職などに関する内容を講義形式で行う知識習得型の研修です。B型は、外部の講師による演習やグループ単位の意見交換を中心としたスキルアップのための集合研修で、若手には手厚く研修をしています。就任者研修や主事補研修A型では、各部署の所属長や先輩職員が講師として講義を行います。講師は自分の業務を棚卸しし、改めて業務を振り返る良い機会となるため、次の研修の際も積極的に講師を引き受けてくれます。このことがひとつの特色だと思えます。また2011年度に実施した「合宿研修」も再開できればと思っています。学外で一晩過ごすことで、研修の振り返りや、懇親の場が持てるので、手間以上に得られるものがあると思えます。今後は世代間を繋ぐ取り組み、他部署の管理職や先輩職員が教えあうような仕掛けをつくりたいですね。



[屋山] 合宿も縦軸、横軸に加えて、斜めの軸をつくるには有効だと人事課内では話をしていますが、まだ実現していません。キャンパスがわかれますと所属同士の触れ合いが少なくなるので、その機会は意図的に作らないと得られないですね。

**Q** 傾聴型の研修を定着させるための工夫はされていますか？

[内藤] 集合研修は、演習が多く、グループ単位でいろいろな意見を交換させるのが主流です。また、今は学内のホームページに集合研修のレジュメやプログラム、スケジュールを掲載しており、所属長も実施内容が分かるようになっています。業務に密着するような研修テーマの場合、必要に応じて各所属長にもテキストを配付し、共有することで、OJTに繋げる工夫をしており、研修を一過性のものに終わらせないようにしています。

**Q** 研修後のフィードバックや効果の把握は、どのようにされていますか？

[内藤] 基本的にはアンケートです。そのなかで受講者からの否定的な意見や、今後経験したい研修に関する意見を探して改善する事を特に大切にしています。あとは、評価指標がないというのが課題で、アンケート以外に何をもって効果測定をするかですね。

**Q** 世代別で研修に関する要望に傾向はありますか？

[内藤] 主事補や主事、20代の職員は吸収意欲が旺盛なので、別の資格を対象とした研修の内容にも興味を持ったりします。一方、副参事Ⅱ以上、30代前半の職員は、大学運営に関する課題解決、問題発見、提案力を高める研修に気持ちがいきますね。もっとも、業務命令による集合研修を行って



いるのは、主事補、主事、副参事Ⅱまでで、それ以上は、自己研鑽の研修にシフトしてもらいたと思っています。本学は研修補助制度を設けており、補助費を利用して語学学校や大学院に通う職員も少しずつ増えています。

**Q 研修を行う上で工夫をされたり、課題だと感じておられる部分はありますか？**

**〔内藤〕** 主事補の5年間で、2年と3年に分けて考えており、最初の2年間は社会人基礎力に関する研修を行っています。しかし、以前は15人程度の人数で集合研修ができましたが、近年は採用者数の関係で、5～6人程になるため、少ないからこそできるような研修に変えたりもしています。例えば、ロジカルシンキングをテーマにしても、ロジカルライティングに特化して、書くことで色々な提案をさせることに変えた方が良くなるというように、各年代の職員の顔を思い浮かべ、時には所属長に対して、若手について感じている改善点などを聞き取りしながら、研修内容を組み替えたりすることもあります。時代も変わり職員も変わりますので、最近では、現場の状況を見ながら研修内容をアレンジしています。そういう意味では、研修に完成形はないと思います。また、若手や中堅といった30代にはPBL研修を実施してみたいと考えてます。

**Q 複数キャンパスを擁する総合大学として事業展開されている貴学では、特に部署やキャンパスを超えた調整力が職員にも求められていると思いますが、いかがでしょうか。**

**〔屋山〕** どの大学でも同じだと思いますが、どうしても大学は機能で分けられないといけません。でもその機能同士が繋がって、「ケースバイケース」で色々な組み合わせで仕事を進めることが最近必要となっています。たとえば、今回新設するラーニングcommonsの運営でも複数のキャンパス・部署を繋ぐ組織体、会議体を作るように話を進めています。研修の観点では、働く職員の意識は今までとは少し違うという状況になってきますので、意識を刺激するというのが、今後の研修には求められるように思います。

**Q 職員採用についての工夫をお聞かせください。**

**〔屋山〕** まず、採用説明会で、応募してくる学生の認識不足を解消するために、窓口での学生対応だけではない、アドミニストレーターとしての仕事内容をきっちり説明しています。また、若手職員にも採用説明会に関わってもらい、学生に採用当時の話をしたりすることで、大学の将来を担う後輩の採用に関わり、後輩職員を育てるんだという意識を持てる職員を増やすようにしています。最近では、その効果もあって、入職後にミスマッチを感じるという職員は減ってきているように思います。

**Q 最近の若手職員の意識は変わったと実感されていますか？**

**〔内藤〕** 最近思うのが、人はそんな簡単に判断できないものだということです。人を見るのはすごく難しい。ずっと期待を持ち続けて、成長を見続けることが大切だと思います。そして、大学を担う職員になった時に初めて「ああ、ここまでの職員になってくれたんだ」と実感すると思いますね。



**〔屋山〕** 人というのは個人差があり、大器晩成型の人もいれば、自分が先頭になって動く人もいます。やはり組織ですから、いろんなタイプが必要です。私はもともと育成は「植林と似ているな」と思っています。採用した職員が成木になって花をさかせ、実をつける頃には私たちはいないかもしれませんが、それを繋いでいくことで、組織は継続的に維持していきます。我々は10年後、20年後にこの職員がどういう成長を遂げるだろうというイメージをしながら手さぐりではありますが、研修も作っていきますし、採用の時から手をかけたという考えですね。

**Q 龍谷大学の今後の展開や大学コンソーシアム京都への期待をお聞かせください。**

**〔屋山〕** 大学コンソーシアム京都は多くの大学の様々な立場の方と触れ合える機会があります。その大きな財産や特色を生かした研修の場を、時代の流れに沿う形で変化させて頂きたいと思います。大学単独で行う研修には限界がありますし、何より私が危機感をもっているのが、「少子化」についてです。特に付属校を抱えておられる大学や中学・高校にかなり影響が出始めておりますし、今後それが加速していくなかで、高等教育機関は冬の時代を迎えます。そこを予見した時に10年先、20年先を常に頭の中に意識しながら1日の業務に取り組む必要があるわけですね。単独の大学では投資力に限界があることを考えると、やはり共同での部分と切磋琢磨する部分に分けて考えるべきです。人やお金の出資が大変だと思うのではなく、共通項となるものの利益については共有すればいいと思います。生き残りのためにはシビアな視点も必要ですし、今後の取り組みについても考えていきたいですね。

**〔内藤〕** 本学でもそうなのですが、採用者が一定数の範囲のなかで、集合研修が開催しにくくなってきています。例えば就任前研修の他に、大学職員の知識を身につける、若手職員向けの合同研修が大学コンソーシアム京都で行われて、それが合宿研修だった場合、懇親会などを通じて、お互い切磋琢磨できる場になるのではと思います。また各大学の人事担当者が運営委員となって関わると、運営委員同士の交流も図れると思います。そういった大学単独ではできない事を開催して頂けるといいですね。

【取材日】2014年10月31日

# 大学コンソーシアム京都 今後の事業の展開

大学コンソーシアム京都(以下、コンソ京都)では、2014年度より「第4ステージプラン」に基づき、5か年計画で事業を進めています。  
2年目にあたる2015年度の取り組みをご紹介します。

## 《教育・施設管理事業部》

### ● 単位互換事業

単位互換制度とは、他大学が提供する正規科目を履修し、その単位が自大学の単位として認定される制度です。当財団では約50の大学・短期大学部が一同に協定を締結し、制度を運営しており、日本で最大の規模を誇ります。2015年度は古都京都ならではの特色を活かし、世界文化遺産に登録されている上賀茂神社や清水寺、二条城など6か所を学びのフィールドに、これらの文化遺産が抱える課題や諸問題について、PBLの手法で解決を図る「京都世界遺産PBL<sup>(※1)</sup>科目」を新設します。



▲ 単位互換の授業風景

(※1)  
PBL = project based learning  
課題発見解決学習

### ● 生涯学習事業（京カレッジ）

コンソ京都では、単位互換制度と連携し、1997年度から「シティーカレッジ」を開講してきました。財団の加盟校が有する知の資源を地域に開放する生涯学習事業として、現在は京都市との主催で「京(みやこ)カレッジ」と名称を変え、300を超える科目を提供しています。京カレッジでは、「大学講義」「市民教養講座」「キャリアアップ」「京都力養成コース」の区分で科目提供を行っていますが、次年度は、2016年度に予定している京カレッジの再編に向けて、科目の整理や特色ある講座開設の支援策、大学と連携した広報活動体制の構築などを検討していきます。

### ● 施設管理事業

京都市から管理を委託されている「京都市大学のまち交流センター」(愛称：キャンパスプラザ京都、2000年開館)の指定管理者(2015～2018年度)として、講義室や演習室の貸し出し業務等を、京都市と連携して適切な施設の管理・運営を担っていきます。

## 《教育開発事業部》

### ● FD事業

FD事業は、教員の教育力を向上させるための組織的な取り組みを行っています。2015年度は、第21回目となる「FDフォーラム」、文部科学省戦略的大学連携事業(2008～2010年度)の採択をうけ、開発実施してきた階層別FD研修(執行部・FDer・新任教員)を継続して実施します。また、高等教育情報ポータルサイト「教まちや」による情報発信を推進します。全体として、コンソーシアムという形態を活用して加盟校の事例発信、情報共有、交流機能の強化を図ります。

### ● SD事業

SD事業は、加盟校の大学職員を対象とした資質向上のための様々な研修事業を展開しています。2015年度は、従来の「SDフォーラム」、「大学職員共同研修」、「SDワークショップ」に加え、休止中の「大学アドミニストレーター研修」を「SDゼミナール」として、6年以上の職務経験を積んだ職員を対象としたプログラムにリニューアルして実施します。また、新任・若手職員向けのSDガイドブックも発行します。



▲ 留学フェア



▲ SDフォーラム

### ● 国際連携事業

国際連携事業は、コンソーシアムという形態を活用して加盟大学の国際交流の底上げ、また海外2都市との提携条約を利用した単位互換制度による送り出し、教職員の国際的なスキル向上の為に英語スキルアップ研修や留学生の住宅支援などを行っています。京都市と協働ですすめる「京都ならではの短期受け入れ事業」は2015年度に正式に海外からの参加者を集め、年2回実施する予定です。もう一つの協働事業である「海外留学派遣プログラム開発支援事業」も、更なる充実を図ります。京都市、英検、また教育委員会などと協働して開催した留学フェアやディベートフェアなど2014年度からのイベントも好評につき継続予定です。

## 《 高大連携・インターンシップ事業部 》

高大連携事業とインターンシップ事業を2本柱に据え、各企画に取り組んでいます。

2015年度、高大連携事業では、高校生・大学生を対象とした「キャリア教育」の視点に重点を置き、質の向上及び合理的運営に努めます。従来から実施してきた以下の事業①～⑥についてはプログラムの改善を積極的に行いつつ、引き続き実施する予定です。(①実践研究共同教育プログラム、②高大連携教育フォーラム、③京都の大学「学び」フォーラム、④京都府北部地域生徒向けキャリア企画、⑤女子生徒・学生向けキャリア教育企画、⑥ Kyoto カタリ場) また、高校と大学の接続教育を考えると、高校の先生との連携も重要なポイントと考えられます。そのような視点に立った新規事業の検討をはじめます。



▲ インターンシップの様子



▲ 「学び」フォーラム

インターンシップ事業は、事業創設時より受講生・受入団体の増加、拡大とプログラム水準の高度化を進めていますが、近年、インターンシップが広く認知され定着してきたことに伴い、財団事業としての特色化が求められています。2015年度は、コース設定(ビジネスコース・パブリックコースとプログレスコース)は継承しつつ、質的充実のために、講義内容も含めたプログラム全体の見直しや改善を、インターンシップ研究会を中心とした体制で推進します。

## 《 学生交流事業部 》 ※次年度、障害学生支援事業も行います。

### ● 京都学生祭典

京都学生祭典は、大学の枠を越えた京都の学生が、経済界・行政・地域・大学と連携を図った上で「学生のまち京都」を社会へ発信し、さらに京都地域の活性化に繋げ、新しい魅力を創出することを目指しています。毎年10月に平安神宮・岡崎公園一帯で開催される本祭に加え、オリジナル創作おどり「京炎そでふれ!」や打ち水活動等を通じた地域交流活動等を継続して行います。



▲ 京都学生祭典(本祭)



▲ 京都国際学生映画祭

2015年度は新しい試みとして京都学生祭典学生実行委員に対する活動を通じた成長実感調査を実施します。実行委員会においては、他大学の学生や企業人との交流、目標を決め計画を立てて、期日までに確実に業務を遂行するなどの活動を行っています。そのような活動から社会で求められる能力「ジェネリックスキル」が育まれているものと考えています。そこで、学生祭典実行委員会活動を通じて、学生が具体的にどのように成長するのかを客観的に可視化できることを目指します。それらを各種ステークホルダーに対して事業の意義や効果を説明する際の根拠材料として活用し、京都学生祭典事業の更なる普及を図ります。

### ● 京都国際学生映画祭

京都国際学生映画祭は学生が主体となり運営を行っている日本最大の国際学生映画祭です。日本国内はもちろん世界中の学生から映画を募集・審査し、入選作品を上映するコンペティションプログラムを中心としており、その他にもさまざまな特別企画や連携企画を開催しています。映画のジャンルや国籍、年齢を超えた交流の場となることを目指しています。

## 《 調査・広報事業部 》

### ● 調査企画事業

財団業務の効果測定、事業改善に向けて、現在の事業課題について調査・研究を進めるため、体制の整備と調査・研究実施のサポートを行います。

### ● 大学のまち京都・学生のまち京都 推進共同事業

京都が「大学・学生のまち」であること、また京都の魅力を中高生や保護者へ効果的にプロモーションするため、学生の目線による、学生の力を活用した事業展開を進めます。

### ● 広報事業

コンソ京都WEBサイトのコンテンツのより一層の充実と、SNSや冊子など多様な媒体を掛け合わせて効果的な情報発信を行います。また、京都の大学への進学情報誌『京都の学び「学びスタイル」』を発行し、高校生を中心に、「京都のまちの魅力」が伝わるよう、一層充実させた冊子作成に努めます。

### ● 都市政策研究推進事業

「京都から発信する政策研究交流大会」は、2015年度11回目を迎え、「都



▲ 京都から発信する政策研究交流大会



▲ 学まちコラボ(大学地域連携創造・支援)

市」が抱える課題について、多様な分野からのアプローチにより、学部生・大学院生から研究発表を行います。2014年度は、芸術文化、ワーク・ライフ・バランスなどの視点からの研究発表も募集し、来年度も幅広いテーマの発表が期待されます。大会運営は、学生実行委員が主体となり参加していますので、実行委員の募集も行います。また、京都市との協働事業である「学まちコラボ事業」は、地域の活性化を目指し、学生団体と地域が協働し「コラボ」する、特色のある取り組みに対して支援を行います。

### ● 未来の京都創造研究事業(シンクタンク)

2015年度に5年目を迎える京都市との共同事業「未来の京都創造研究事業」は、未来の京都づくりに向けた政策を創造するための調査・研究を行う研究者を引き続き募集します。また、特色ある研究に取り組む意欲ある若手研究者の研究成果が京都市の関連事業の具体化につながるなど、一定の成果が出始めており、さらなる成果が得られることが期待されます。

# Information 2014 冬期・2015 開催予定

## 教育開発事業部

[ FD 事業 ]

### 2014 年 FDer 塾シンポジウム

カリキュラム・デザインとは何か？  
～一貫性のあるカリキュラム構築を目指して～

開催日時 2015年1月24日(土) 13:00～ 場所 キャンパスプラザ京都 第1講義室

### 第20回 FD フォーラム

学修支援を問う～何のために、何をどこまでやるべきか～

開催日時 2015年2月28日(土)・3月1日(日) 場所 同志社大学今出川校地

### 新任教員 FD 合同研修プログラム B

開催日時 2015年3月7日(土)、3月8日(日) 場所 キャンパスプラザ京都 2階ホール

[ 国際連携事業 ]

### 2014 年 教職員のための留学フェア

および海外留学派遣プログラム開発支援事業成果報告会(仮題)

開催日時 2015年3月28日(土) 15:00～18:00

場所 キャンパスプラザ京都 2階ホール 定員数 60～70

[参加費無料・事前登録の方法は、コンソ京都ホームページに1月中旬に掲載される予定です。]

### 大使館・公的機関 in 留学フェア

開催日時 2015年6月～7月(未定)

場所 キャンパスプラザ京都 2階ホール及び講義室 定員数 200～300

## 教育・施設管理事業部

### 単位互換事業「京都世界遺産 PBL 科目」

2015年度から財団のコーディネートのもと、京都の世界遺産社寺城と連携して、それらの課題解決を図る PBL 科目(下表)の新設を予定しています。出願は3月下旬～4月上旬を予定しています。詳細については、コンソ京都ホームページ(随時更新予定)もしくは3月中旬に公開するシラバスでご確認ください。

世界文化遺産	大学	テーマ
上賀茂神社	京都産業大学	上賀茂神社の行事の魅力を生徒視点で発信する
	京都ノートルダム女子大学	光、音、熱の環境測定を通して上賀茂神社の魅力を発見する
醍醐寺	龍谷大学	語りから未来を紡ぐ醍醐寺、住民、学生の3者協働
	京都橘大学	醍醐寺のパブリックな取り組みを観察・調査し、さらに広いパブリック化を模索する
二条城	同志社大学	O2O(Online to Online) マーケティングの手法から地域活性化の「仕掛け」を創り出す
東寺	京都市立芸術大学	日本画の伝統表現を使い、後世に伝えたいオリジナルの記録を制作する
清水寺	立命館大学	清水寺の新たな見どころを発見し、さらなる「ユニバーサルデザイン」を提案する
仁和寺	立命館大学	学生・地域・世界がつながり、仁和寺の魅力を高めるには？

## 総務部

### 第12回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム

テーマ 大学コンソーシアムの原点と新たなる展開～大学連携は何処から来て何処へ向かうのか～

内容(予定) 基調講演、シンポジウム、分科会、ポスターセッション、情報交換会

開催日時 2015年9月12日(土)、9月13日(日)

場所 金沢工業大学(扇が丘キャンパス)(石川県野々市市)

主催 全国大学コンソーシアム協議会

共催 一般社団法人 大学コンソーシアム石川

### 【お申し込みについて】

2015年6月頃にコンソ京都のホームページにてお知らせいたします。

## WEBサイトリニューアルについて

公益財団法人 大学コンソーシアム京都は、2014年7月1日(火)よりWEBサイトをリニューアルいたしました。今回のリニューアルでは、ご利用者の皆様により見やすく、より快適にご利用できるWEBサイトを目指し、デザイン・構成とも一新いたしました。

今後も、大学コンソーシアム京都では、利用しやすいWEBサイトを目指してまいりますので、引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

大学コンソーシアム京都



公益財団法人 大学コンソーシアム京都  
The Consortium of Universities in Kyoto

〒600-8216

京都市下京区西洞院通塩小路下ル

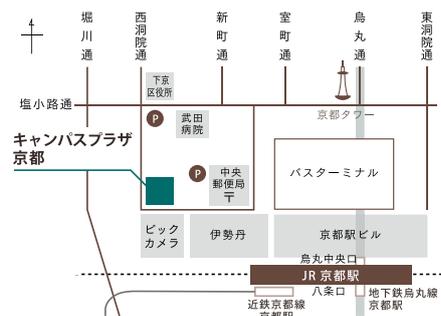
キャンパスプラザ京都

TEL : 075-353-9100

FAX : 075-353-9101

E-mail : pr-ml@consortium.or.jp

ホームページ : <http://www.consortium.or.jp/>



大学コンソーシアム京都